



龜 さ

岡田美知代

てこ市(雛市)は毎年、舊暦二月二十四日に立つ定例なので、寒い寒い西備の片山陰も、流石は春である。彼岸過ぎての七雪と昔からの云ひ傳へはあるが、降る消える云つた有様で、唯僅に此處彼處、北向きの隠地に白く残つて見えるばかり、今梅の盛りに、折々は鶯山鳴く、畑ものは青々と麥も三寸は伸びて、青柳の糸美しう、木と云ふ木は芽ぐみ、早や程も無い節句の準備に、桃は緋をふき初めた。

此日近郷近在から上下の町へ出て来るものは、いつもの親父連の外に、五つ六つから十三四迄の女の子、手織綿ではあるが仕立おろしの綿入れに、メリンヌ赤地模様の帯をしめ、中には裾高々とからげて、赤いゆもじに紺足袋と云ふ打扮のものもある。これらは皆な永い一年中、叱られる度の條件に、云ふ事を聞かなければ、音無しくしななければ、最早上下のてこ市へは連れて行かぬと繰り返へされて、一にもてこ市、二にもてこ市と楽しみ暮した連中で、唯ニコニコと満足相に買つて貰つたてを抱いて、連れられた親や姉兄に離れじと寄り添ひ、其短い袂の先きをしっかりと握りながら、風船の笛を八釜

しく吹き鳴らす。

をなご共は知り顔に出會ふ度毎、雑踏の中にも一々丁寧な、姉襟冠りにした淺黄地の手拭をとつて、久しく御無沙汰のお詫言やら、時候の挨拶やらを長たらしく交し、今年は節季の恐ろしく寒く凍てたにも拘らず、麥株の出来榮えが立派だから此割合て行くと、案外年柄が好いかも知れぬと悦び合つて居る。

市は今が眞盛りで、遠く府中、尾道など他所から入り込んだ賣手は、家並に門店を張り、唐津人形張子の虎の隣りは菓子商で、赤毛布を敷いた戸板の上に、青赤黄五色の金米糖を山の様に盛り上げ、其又隣りには赤く色付けた肉桂水を瓢箪なりの瓶に入れ大小とりくりに置き並べ、向ふ側には金柑夏蜜柑錦花糖と、眼をひき口に唾を湧かしめるものばかり、小供等は容易に素通りする事が出来ないて、握つた袂を振り動かし、よう／＼とせびつて、漸く其内の一品を買つて貰ひ、なほ未練氣な眼差に見入りながら静かに歩む。

其外ろくろ首、人面蛇體の生れ損ひ、一寸法師曲藝の見世物手品經業のあらゆる種類を盡し、一寸小奇麗な押繪を看板に、旅かせぎの若いおどきや夫婦か、少しく鼻が／＼つた艶な聲で鈴木主水のくどきを掛け合に歌つて、娘達や若い衆共を酔して居ると、此處には運勢縁談待人失せもの、賣卜者が陣取つて、今しも疲せて物案じたらしい様子の農夫を相手に、何處迄も浪々の身と云つたさまに、深編笠をして顔は解らぬが黒木綿の紋付きもの／＼しく、笠竹を振り、暫く卦のおもてを見入つた後、

『お前さんとこの中庭に大きな榎があるだらう』

『いんね、俺とこにやそんげな物ありやんせんがな……』と云つて不思議相に見つめられ、先生少々どきまぎしたが、『無くて幸福、有れば生命に關する大事』など、やつて居る。

と此時裏町に住んだ龜サが此處を通りかゝつて、往來に落ちて居た昆布の切れつばしを見つけた、龜サは本當の赤貧者で、近在から買つて來た青物類を、極めて僅かな口錢で町に賣り歩き、漸く其日々に送つて居るのであるが、性來些とのろい方で、ともすれば賣買も手違ひになり勝なのである。暫く考へて四邊を見廻したけれ共、仕合せと人も氣付かぬ様子に、つと身を曲めて其昆布を拾ひ取り、懷ろ深く押込んだが、ふと向ふの下駄屋の間が此方を見て居るのに氣がついた。如何に困ればとて、路傍に落ち散つた昆布の切れつばちなんぞ拾つた處を、他人に見られたかと思ふと、流石に氣恥しく、思はず顔を染めて、あたふた群集の中へと駆け込んだ。

彼れ是れする内に愈々人が出て、やがて晝食時と成つて、百性衆はそばやへ入るもあれば、煮賣屋、飯屋と思ひ／＼に腰を掛け、豆腐汁やら煮魚やら、御馳走のありたけを盡して小供を喜ばせるのであつたが、午後は一層の雑踏を極めて、足を踏んだと云つて怒鳴るもあれば、てがめけた(こわれ)と泣き叫ぶもあり、酔つ拂つてくだをまく親父もあつた。そして女小供につけ込むすりか居るも知れぬと云ふので、角袖の巡査數名、彼處の辻此處の辻と、要所々々を警戒して居るとの噂さ。

賑々しい樂の調べが、つい近くの辻から聞えた、物見高い

群集は小供を先きにどや／＼駆けつけた。此處いらには餘り

見かけぬ海老茶袴の浦若い髪一人、日にやけて色こそ淺黒けれ、細面の一寸眼につく容貌で、氣取つた様子に膝を揺りながら手風琴を鳴して居たが、傍の手提鞆の中から紙袋入りの薬を取り出し、さわやかな辨舌で、例の効能を説き初めた——皆さん、これは軍中錦の花と申しまして、彼の日露戦争の砌り、上は大將下は軍夫人足に至る迄、必ず携帯致しましたるところの名譽の妙薬、在來ありきたりの賣薬とは違つて、東京は日本橋區松井藥舖發賣、醫學博士佐藤先生發明にかゝる軍中錦の花、頭痛腹痛打身切瘡脚氣腫痛、一切の痛い處へ今張つて今治る、一袋八錢の定價なれど、今回私東京の女學校を卒業して郷里出雲へ歸るに就き、聊か祝意を表して、今日に限り原價半額即ち一袋四錢で以て差上げます、併し何分にも旅の事で澤山の持ち合せは無い、サアサア皆さん、うつかり買ひ後れて後悔なさるな——

群集はうつとりと其よく動く口に見入つて居る、龜サも其中に居て、今廂髪から薬を買ひ取つた若者の隣りに立つた男は如何やら見た事のある、少し古びて白茶が／＼つた豆絞りの手拭を頬冠りに、不呂敷包を脊負つて、めざしたの紙袋入りの切り昆布だののぞいて居る具合は、如何様も百性にも見えるけれど、眼付口元、否それよりも争はれぬのは尋常な足つきで、眞直ぐな兩脚は如何見ても、骨の折れる野良仕事をしたものとは受けとれぬ、若しや河村巡査では無いかしら等思ひながら、じつと見入るのであつたが、ふと眼と眼と出會つた時、何と云ふ事は無く、急いでわきを見た、と頬冠りの

男は傍へ来て、『龜、俺と一所に警察迄来い』龜サは酷く惶れた様子で、ものをも云はず逃げ出そうとしたが、ムツと手を執られたので仕方無く、『俺何も悪さした覚え無えに……』

『何でも好、警察迄来るんだ』

群衆の視線は齊しく此方の二人に集つて、憚つた様な囁きの中にも、すり、すりの言葉が耳立つて聞える、中には今更の様に懷中を壓つて見るものもあり、面白半分あとをつけて、立つては不可ん、立つては不可んと警察の前で叱られた上、に追ひ返される者もあつた。警察では夥しい煩悩に、犯し難い威厳を保つた署長が待つて居て、『龜、汝あ今朝縞の財布を拾つたらう、それに何故届けて出ない、怪しからん奴だ』

龜サはもう怖れのためにわな／＼慄つて、口もさ／＼得なかつたが、『俺が人の財布を拾ふたつて？』左様だ、現在それにや證據人もある』『でも俺をんげな事するではあ覚え無えに喃、署長様俺知りやんせんが』『黙れ、幾ら隠したところで、最早確な證據が上つてゐる以上駄目だぞ、コラ真直ぐに白狀しろ、拾ひましたと白狀さへすれば免して遣る、な、強情張らないで早く白狀するが好い、汝のために悪い様にやしないから、喃龜解つたかい』『でも俺何も白狀する事ありやせんて……』

『併し汝あ急に米屋の借金を拂つたてぢやないか、一體其金は如何したんだ』『アッ、それはあの、あの……』とへどもどして行き塞つた體『それ、財布から出したんだらう』『否、全く以て、鎮守様も見て御座らつしやる、如何様米屋の借金のう拂ふやて拂ふたけんど』『だから其金の出處を聞いて

るぢや無いか』『へエ、その實あ、少々内證でやんすが、嬪の母親が昨日そつと持つて来て呉れやんしたて』『よーッ、好い加減虚言を吐け、今に立派な證據を出して見ん事白狀させて見せるから、』と署長は次の室を覗いて『御苦勞ながら一寸』と出て來たのは下駄屋の手間で、流石に氣の毒らしい、『龜サ恨ではあ呉れな、したが最早斯う成つちや仕方が無いであんたも白狀したのが好い』

龜サは漸つと思ひ當つて、眞赤に成つて怒つたが『アッ』と一聲叫んだぎり、それと同時に再び口をさくことは出来なかつた『如何だ恐れ入つたか』

署長の言葉に龜サは根かぎり頭を振つて、懷ろから例の昆布を取り出し、涙ながらに不完全な手眞似で以て、拾つたのは財布では無く、全く此昆布の切れつばしに相違ないと云ふ事を繰り返し／＼證明した。遂に署長も眞疑の判斷に困つて、證據不充分と云ふ名議の下に、龜サは免されて其日の暮方家に歸つたさう沙汰無し。

けれ共狭い上下の町に此事件の噂さは忽ちにして廣まつた。人々は同情半分、面白半分、啞の龜サを取り巻いては成行きを尋ねた、最初の程には一生懸命さけない口で身の潔白を證明もして見たが、誰一人眞面目に聞いて呉れる者も無いので、龜サは愈々激しく憤慨し、ごうを煮やして、果てはわれから身を捨て鉢に、無けなしの錢でコッブ酒をあほつては、殆んど毎日『泥捧龜サ、酒醉龜サ』と小供等のなぶり者に成つて居る。